

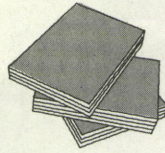
# 「さながらの生活」から始めることが

## 幼児教育の原点

上垣内伸子

一九三〇（昭和五）年、三度目の附属幼稚園主事（園長）となった四十八歳の倉橋は、若  
いころよりあたたかためていた保育思想を、系統的な保育理論として発表していきます。翌六  
年には『就学前の教育』、九年には彼の保育論の結晶とも言うべき『幼稚園保育法真諦』が  
出版されます。戦後（昭和二十八年）、倉橋は「私の考えが、尚この枠の中を往來している」  
として、第四編「誘導保育案」を削除し、『幼稚園真諦』として復刊させました。倉橋自身が  
「何だか呪文のように」と語る「生活を生活で生活へ」とは、『幼稚園真諦』に記された彼の保  
育思想を象徴的に表現した言葉であり、彼の保育思想の中心をなすものといえます。

「生活を生活で生活へ」を解題すれば、幼児の自然な生活、さながらの生活を大切にし  
て、家庭との境目のない自然な形で幼稚園生活をスタートさせ（生活を）、保育者が配慮  
し用意した設備のもとで、自由感をもって十分に生活を生活として味わうことで充実感を  
得（生活で）、さらに生活興味が利那的ではなく、系統的なものとなっていくことにより  
生活自体の発展と深まりが得られ、子ども自身が自分の成長を実感していくような生活へ  
と導かれていく（生活へ）、とでも表すことができるでしょうか。



『幼稚園真諦』の第一編の最後（p. 61）に、保育法の道筋として、

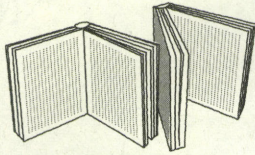
幼児のさながらの生活——自由・設備——自己充実——充実指導——誘導——教導

と記されています。幼児一人ひとりの自発性に基づく「さながらの生活」から始まり、

「幼児の生活を十分生活らしさにおいて害わないためには、幼稚園生活の形態に、自由の要素をできるだけ多くもたせ」、「幼児の生活が、その自己充実力を十分発揮し得る設備」

と、「子供に生活の自由が十分許されているという幼稚園全体の態度」の中で、幼児自らが自由感をもって十分に遊ぶことによって自己充実していく、さらに「子供が自分の力で充実したくても、自分だけでそれが出来ないでいるところ」を「子供の内に入って子供のしている自己充実を内から指導して」いき、「子供の興味に即した主題をもって、子供たちの生活を誘導し」生活に系統を与えていくことで生活興味をより深いものへと変化させ、そして最後に「もう一つこれを付け加えてやりたい」ということを教導するという保育法です。倉橋は、「幼稚園はどこまでいっても、幼児の生活の生活たる本質をこわさないで、教育していくところに、その方法の真諦が存する」と述べています（『幼稚園真諦』p. 30～50参照）。

幼児が「さながらの生活」を幼稚園で十分に展開し遊ぶことで自己充実し、より系統的な生活興味へと誘導されることにより、つまり、幼稚園で保育者の細やかな心遣いと環境のもとで自己発揮して一日（もしくは数日）を過ごしたならば、始めと終わりでは、その子どもの「生活」の質は明らかに変わっていることでしょう。「生活を生活で生活へ」と



いう時、三つの「生活」の質の違いに着目しておきたいものです。

このように倉橋は、保育を考える際に、何よりもまず、幼児のさながらの生活を尊重した人物でした。幼児の自発的・生活の尊重から教育が始まるという発想や「生活」へのこだわりは、東京女子高等師範学校に着任し、幼児教育研究者としてのスタートをきったごく初期から、一貫してもち続けていたものです。

彼の初めての保育論ともいえる「幼児教育の特色」（大正四年）では、幼児の自発的・生活は、「形が自発的であるということ以外に、充実した内容を有して」おり、「自発的・生活の内容を尊重し、それを利用して積極的に幼児を教育して行く」ことが重要と述べ、「幼児教育の第一義」（大正五年）では、「幼児教育の第一義は幼児生活の価値を知ることである」と主張しています（倉橋惣三文庫6『幼稚園雑草（下）』フレール館 参照）。「就学前の教育」（昭和六年）では、就学前教育法の特性として「生活本位」（生活としての実質を離れない、生活としての自然を失わせない）をあげ、さらに「教育者自身の生活による誘導、生活性そのものによる生活性の教育である（生活による誘発）」と、保育者自身の生活性の重要性も指摘しています（『倉橋惣三選集第三卷』フレール館 参照）。

倉橋の「さながらの生活の尊重」という考えは、現幼稚園教育要領にも、「幼児期にふさわしい生活の展開」（第一章総則1幼稚園教育の基本）という表現となつて生き続けます。「生活を生活で生活へ」とは、いまも変わらぬ保育課題なのではないでしょうか。

（十文字学園女子大学教授）